

(乙)

学位論文抄録

日本人の生活習慣の変化と胃食道逆流症との関連
(Relation between GERD and change of Japanese lifestyle)

村尾 哲哉

指導教員

佐々木 裕 教授

熊本大学大学院医学教育部博士課程医学専攻消化器内科学

学位論文抄録

【目的】 胃食道逆流症 (gastro esophageal reflux disease、以下 GERD) は欧米諸国では頻繁に見られる疾患である。近年、日本でもガイドラインが策定され、疫学や治療に関しての研究が進められているが、本疾患の関連因子については未だ詳細不明の点も多い。本研究では、人間ドック受診者を対象として、胃食道逆流症に関連する因子、とりわけ性差や生活習慣にかかわるものを明らかにすること、およびそれを基に、胃・食道逆流症の予防や症状の改善に結びつく新たな治療戦略を考案することを目的とした。

【方法】 2004年7月から2005年3月までの間に、人間ドックを受診した2853名を対象とした。症状の調査には日本語版のクエスチョン表を使用し、問診表で6点以上の場合、あるいは内視鏡所見により逆流性食道炎が認められる場合をGERDと定義した。GERDと判断された対象者を、①症状のない食道炎のみを認める群(無症状食道炎、asymptomatic erosive reflux disease、以下 a-ERD)、②症状と食道炎との両者を認める群(有症状食道炎、symptomatic erosive reflux disease、以下 s-ERD)、③食道炎はないが症状のみ認める群(非びらん性逆流症、non erosive reflux disease、以下 NERD)の3群に分類した。関連因子に関してはロジスティック回帰分析を用いて解析を行い検討した。

【結果】 GERDは667人(対象者全体の23.4%)に認められた。そのうち a-ERD 群は232人(8.1%)、s-ERD 群は91人(3.2%)、NERD 群は344人(12.1%)であった。

【考察】 正常群と疾患群を対象に単変量解析を行った後、有意差の認められた項目に関して多変量解析を行った。GERDに関連する因子としては、BMI 高値、食道裂孔ヘルニアの存在、睡眠不足、運動不足、緑茶を飲む習慣が挙げられた。また GERD を上述の3群に分類して解析した結果、a-ERD 群と NERD 群では男女の違いが有意な関連因子であった。男女別に分けた解析結果で、生活習慣に関連する因子としては男性の s-ERD 群で喫煙が、NERD 群で睡眠不足が挙げられた。また女性の GERD、NERD 群で運動不足が関連していた。

【結論】 今回の検討から、無症状の人でも GERD になりうること、また生活習慣や性差が GERD に関連することが明らかになった。無症状の場合、病変の早期発見に関しては人間ドック等の検診が重要になると考えられる。また、治療に関して言えば、生活習慣の改善が GERD 患者の治療には有用とされている。今回明らかになった、性差を考慮したうえで生活習慣を改善することは、GERD の治療のみならず発症の予防に役立つと考えられた。